



綾錦卷之下

沾涼得



三十六番句合

一番

左 首歳不二



蓬萊やゆる秋のこゝろハ山 露沾

月日福縁をりしあへてとこの
ヤスよりくくの影不いしハ根

右 春不二

名を伺りし知るふかしの花の雪 沾涼

○新勅撰 月の根いとりのもそとくまはる

○身延の石の記云あつ井のまより富士の山をたぐ

碧一 天雪白 白雲間 走卒 兒童 亦 仰顔
東海 初遊 多少 客 富山 不取 問何山

二番 左 芥

嬌びといたれしかりの芥菴 吟市

○枕草子 おゆめうきもの柳のとえたるまき
うきものうきものうきものうきものうきもの
たれしとあはれなる又の枝つけたる

○世談同言 正月の虫湯の月く又七日の虫湯の
ふた月を始ぬのあまのまを喜舎と信

右

みよきん家のまきれも雪芥 沾涼

○古今集序 人元未人のまきれたるまきれたる
人元未人も多し人まきれたるまきれたる

三番 左 梅

聞 志めし人をそとさめ長の梅 東隣

○果堂禪話 梅花ハ悟入師

右

新瓦かこい立ちく来ぬ 園ハ梅 布仙

○碧巖集 隔山見煙早知是火ナトルラ
隔壑見角便知是牛ナトルラ

四番 左 初午

一日の水にと拍子きよの干 魚路

○杜詩曰 魚吹細浪搖歌扇 燕蹴花花落舞筵

○千載 三室山谷のやまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

右

ふ午の一日又なる秋の夜 沾涼

誰邀計會一時秋ナラ

風吹枯木暗天雨 月照平沙夏夜霜

○F

○三

○金葉集

松風の香せりせし後の花何よき

良暹法師

○續古今

月あふみくさくさの浮城のしほ

法成法師

右

辰白小艇 賺 足せん 夜曇り

沾涼

○捨遣

新古の浦の船さへ白く夜涼をさへ

八番

左

ふあき

ふ吹や又拭りて 名 旗り 東巴

○新後捨遣

ふ吹の花はさき散も口ずくはるる

○名名抄

井境の大匠の堂にひくは横侍のまき

ふまゆりまきまの花のうらふふかりをのたさけ

右

ふゆふふ大ハあらくひの月脚外 沾涼

○過野山人所居

寂く孤鶯啼 杏園

○ま本抄 秋のひくまのちくくならぬものさき

ふゆふふをさうぬる 意者

九番

左 ぶさき

九一万里を望みし 今 洛雲雀 正典

○歸去來辭

鳥倦飛而知還

○莊子内篇 北冥有魚其名為鯤 鯨之大不知 其幾千里也 化而為鳥其名為鵬 下略

十九番 左 移川

人乃自北か申こ下も精進の如 逸志

○智度論云一切室中命為第一諸罪中殺生

罪為第一諸善中不殺生戒為第一

右

白髪しつゝ海あり舊船 涼之

○莊子雜篇漁父 有漁父者下船而來鬚眉

交白披髮 掬袂行原以上矣

二十番 左 長北坂

かりもの扱もやまぬ器の外 水戸 沾渡

○拾遺 丹波の如く権の如く

○土史撰 世二三十目より五六十目までの

右

丹波尺ありす行城の 沾涼

○神社考云 玉城、西、山名、愛宕、山、秀出

於嵯峨城 万仞之上

廿一番 左 一葉 秩父小川

園敷して荷札を落す一葉外 沾楯

○淮南子 一葉落天下知秋

○千載 却よほす心 情 葉よて尺

○東鑑云 文治五年七月廿九日 河内國を以

右

トナリよる里鳴りやささるの秋の寺

梅五

○品川鮫頭補陀山海晏寺とみらる

○新勅撰

ひりし誰かおぼ様め程へて
より遊を表めふよなるやう好京抱振

○鳴 送孟東野序

以鳥鳴春以雷鳴夏

以虫鳴秋以風鳴冬下略

廿六番

左

泣泊麻

水戸

笠舟の舟を探々や麻の夢

沾瑤

○秋夜宿淮口

風帆幾處客 天地兩河星

樹靜禽眠艸 沙寒麻過汀

引のふまの人の心は海沖にほりまひ

右

とらぬ種麻子よみとや破まら

沾涼

○我少る里にしまつたるも種をこもるまきあれ

三井の語

○日本記

黒くはのかはを種と云ふ子とまりをうすのめ
くくまゆもいひくくあやのやのやの男麻とあゆ
こくまゆこくまゆこくまゆこくまゆの少るよとまゆ
をこそとるもこくまゆも女麻のこくまゆとあゆ
はくまゆとあゆ人かこくまゆあびてこくまゆ皮を
がれて志をまゆもこくまゆあゆ人といひて麻
をささるあゆこくまゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ
ひつけてるれれも胡さるあゆあゆあゆあゆあゆ
を討こるすてそ皮を記志あゆあゆあゆあゆあゆ
とそとまゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

兵庫の山

廿七番

左

秋海棠

皓魄臺

待まひや秋海棠の風をひく

露庭

○権徳興詩

空圍孤燭夜

羅幌独眠時

○新古今 月夜といふそのおのれを頼り
くろをつらふに花のいろは

右

是もまゝの杜が母に名を承け乃とれ 沾涼

○詩話云 杜子美母名海棠故集中并海棠詩

廿八番 左 上落葉

松の背の瓦をわつく落葉の素 巾車

○菅家御集 刈藪とれをたさうのうらふあき
わけてあしをきぬらんもなき

右

今朝より申渡す木の葉や田子の浦 布仙

○丙辰紀行 富士門の海た才一の志流なり下船

○新古今の古 後深家院の山とてたのこも奔河を流りて

紅葉浮水とてらんをよみ傳へたるの藤原深家御下
幾土よはてふくろく水といふもろくあつたあし

廿九番 左 ちん

海向へひよとて裁出らとてか 賀朝

○鸚鵡越 須戸の北よりと申るらし武原らとてく

かきかへてのまゝの浪をうらふあしはるる
なぐし

○歌枕 猶聽半夜鐘

右

ぬる星の小ほくもを遠くする 沾涼

○古今卷 ちんすまゝのあつたあしはるる
かきかへてのまゝの浪をうらふあしはるる
あつたあしはるるのまゝの浪をうらふあしはるる
まゝの浪をうらふあしはるる

世二番 左

笠重かさむねの雪の志こころは花はなえは 音里ねり

○白氏文集 与君きみ結むす髪かみ五歳

○詩人玉屑 笠重かさむね兵へい天てん雪ゆき鞋くつ香か楚そ地ち花はな

右

髪かみや志こころははの糸いと柳やなぎ 布ぬい仙せん

○若菜わかな卷まき 笠重かさむねの志こころは花はなえは

二月ふたつきの十日じふにちの志こころは花はなえは

笠重かさむねの志こころは花はなえは

世三番 左

我われの志こころは花はなえは 涼宇りやうう

○若菜わかな卷まき 笠重かさむねの志こころは花はなえは

二月ふたつきの十日じふにちの志こころは花はなえは

笠重かさむねの志こころは花はなえは

右

聖せいの志こころは花はなえは 涼宇りやうう

○笠重かさむね 富士ふじ郡ぐん 涼宇りやうう

根ねの志こころは花はなえは 涼宇りやうう

○むつ 岩いわ山やま 涼宇りやうう

明あきの志こころは花はなえは 涼宇りやうう

○うま 頼たの姓せい郡ぐん

笠重かさむねの志こころは花はなえは 涼宇りやうう

笠重かさむねの志こころは花はなえは 涼宇りやうう

下

○下

天正年中伊賀又米郡主菊岡丹波行任四代

現 房行 沾涼 實飯東三夜

○行宣 菊岡隨性軒 号有安如幻

行尚 盡程舎 以実名爲法名

現 行重 記之

和歌ヲ善ス

世談一統三百卷編書其外述作有多

現 行 有隣

伊賀

又米乃袖合山九品寺に在余のころ

碑を之とてこをこて

隨性軒如幻

きふらの神合ふまけくかり坐の居りまも人を

五十歳の春沾涼くふふふふふ

菊岡

衆而そのかひわりの今期のみ

行尚

題 晴 賞

伊賀

くらふす下鶴乃八書法間を

菊岡 記之

享保十三申のゆふ布故つておぼくよけおて雲
勢の教屬多し一教舎に在り

伊賀 菊岡

尔種を人をもむはらの夏木立 有隣

故園今も右もたりもろ 楓 布仙

○勢刈山田

芭蕉門人

影之流く幾の枝や昔あつし 由

團友門山田

雲とかなもれありのるや和時多 芦木

○紀列之連

須原 垣内

ふ里や指味口借しとくさく 環山

おこなめはよりのあつてを

びこよせく枝とくを柳しとく 冬嶺

八宗、殿の悟通子、扇ら、雨ふれ
船を押出、取屋、乃有
儒者、顔乃唐、へら、う、三回、戒、
き、め、も、と、れ、も、も、き、せ、れ、一、
目、て、い、て、は、く、道、好、の、鶴、の、昆、布、
も、め、ぬ、い、ふ、上、羽、扇、論、中、
月、の、昼、初、の、束、も、那、一、男、が、い、
機、姿、一、む、く、ハ、七、三、く、ふ、ひ、
寺、師、幸、敷、屋、富、堺、い、く、は、海、
我、が、一、く、く、い、く、く、自、増、ハ、
欠、と、一、く、く、く、小、槌、ハ、金、の、
比、血、尾、乃、と、く、の、吸、子、ハ、浅、

布 仙
々
々
香 紗
布 仙
香 紗
沾 源
布 仙
香 紗
々
々
々

多、波、あり、鶴、ハ、意、ハ、は、く、ぬ、
跡、跡、ハ、一、信、ハ、高、中、ハ、猛、
聲、ハ、子、取、目、切、本、を、と、公、出、
ふ、切、く、い、ふ、と、十、三、七、
蓮、と、云、菰、治、離、の、喜、政、の、集、
拙、ハ、ハ、志、海、り、つ、き、る、ま、く、む、
つ、い、ま、の、重、六、少、く、は、依、母、子、続、
所、宅、美、く、人、ハ、系、子、地、
信、馬、束、の、拍、子、は、合、江、戸、育、
よ、い、る、ひ、く、く、の、出、く、中、新、糸、
大、ぢ、ハ、夏、の、ま、く、あ、い、ん、ま、ち、
く、く、く、お、も、ん、安、い、地、嫁、

布 仙
々
々
香 紗
布 仙
香 紗
香 紗
布 仙
香 紗
々
々
々

その板の五膳のうら花は茶
世に云ふ一師は二月三月
布仙
沾涼

題東敷山鐘

雲滯て雲さる吞や甚立昂
雪朝甥
石内氏
叙叟

師不知 松木氏 宗因門
政則 同苗 現
蓮之 同苗 現
丈雅 同苗
長子

毛吹草三人
花の散 海やみの星の梅は
政則

江戸八百員三人
お宿り 天物もさし時多
青雲

續江戸我入
何人の疾より度此を小東河
蓮之

七夕

七夕や藪の底は始あり
卜宅

棒とめて大滝子道一星乃あり
梅宇

天北川みり雲川 雲川
活津門 辻氏
吳竹

山多を今看り美人夫婦星
沾涼

傳て来り星子傳 妙由井沖津
涼之

煩惱を一穂子流せ天北川
李條

一目を力そ涙星天北川
蘇菴
麟石

お後あはれの身なり 幾束う銀河
吳竹軒
仙理

牽牛や枕のひを光お月せ
素琴

庭根草の出てゑる今看り守の光
下三府内
左隣

浅水云男もいり星の川
日門 渡辺氏
柵絃

月

百補子白珠垂りやせの月 竹裏
 名月や淋しきまゝの夜は花子 吉田氏 琴月
 庭月を月暈とてよほせの月 北尾氏 賀角
 月洗や文義よつら羊北原 竹田
 待宵の月ハ物うらまの南雲 信州 三省
 肉なきや仁玉の飯は荒かり 沾涼門 仙魚
 富まらぬももゆからう富まらぬ月 感もろく
 感もろく片頬ゆるるねの月 羊の名も
 羊の名も漢捕式部 十三夜 新月や
 新月やわらぬ下あうり店 いここの水菓を
 いここの水菓を—— 十三夜 仙菓堂 五山

秦姓丈岳稿

もろくのきの舟よまをきては雅なるハ号
 多の風雅ぬきかろくくかろくかろく
 くのものまはしき——風雅の和利ハもろく
 よびなりうらまはしき——
 風ハ諷し 其財ハ 雅ハ正し いさぐり欺す
 風ハ大小雅なる早にうらまのうらまのあはし
 風雅ハねよかろくかろくかろくかろく
 我雅人湯湯よらびにを志のくくくくくくく
 けの控めてまろくの夜はまろくの羊 雲はれとさそ
 きかろくかろくかろくかろくかろくかろく

鶯

かゝるものも下まゝもをわづらふものかよひ

世といふもよこしてまはれしものかよひ

又云むつゆも人の子もなるをわづらひし我むすめ
美をわづらひしものかよひとて者も通ひしを
雪の連綿の如くもなるをわづらひし歌連綿の
凡雅の根元なるをわづらひしをわづらひし
雅人といふものもわづらひしをわづらひし
きをわづらひしものかよひもわづらひし
我意あつて
家傳の如くもなるをわづらひし
そのよもわづらひしものかよひもわづらひし
かゝるものも下まゝもをわづらふものかよひ

評 儂

人の名も月も風あり 松風庵 丈岳

独吟

あゝわづらひしものかよひもわづらひし
つよきつよきつよきつよきつよきつよき
そをわづらひしものかよひもわづらひし
我家の如くもなるをわづらひし
あんとしものかよひもわづらひし
茶儀をわづらひしものかよひもわづらひし
情もわづらひしものかよひもわづらひし
暮冬をわづらひしものかよひもわづらひし
所用の如くもなるをわづらひし
一軍せんもわづらひしものかよひもわづらひし
細と細の如くもなるをわづらひし

籠の中や籠なんせうく
角をいんせうく海を指殿
そく鞠の御姿をまの内の雲
出の杭くくばし柳せう
わくく花ありぬきやと雪
結細の香もいさむせぬ梅
君風も一回きも泣荷行
懐くま至り金の埋と
魚の腹虚の扉し葉く
卵さくせし子よりけし
くがりをぬく道やい中北舞
又合点する道竹の種

名さだんたさの注用千裕
新の勢の通具さく
涼水へ月をさる籠のあし
是く目尺、をさせる菊物
回船の蕎麦乃路江のあし
日本の器の並に杖と
白ぬといよの杖を織る
まきく抱竹臨破く
小きん湯氣のいんせう
鞠も清流紗路のいんせう
柳鞠く籠くく花の信路
柳くさき色く柳くく

調和 江原氏 調和門 同苗長子

先生と因て四十年來からぬ席を承るるの今も

養正す神音奉る風和

海より竹と神と肉のまの調和

夜梅

照るや梅多し人も星のまの調和

介我 我尚 周午 同苗 長子 同所

神くを戸かたさぬ神聖の介我

島の鐘や二月のまのたけ我尚

又とまの誓古の里と深くまの周午

良夜

名月や顔の帯白の人通尺

羽翫へる土の又あるところ小北月 沾涼

名月やちいさくなりぬいせの海 捏く

秋の野

所浪如一里の直き壁まの魚路

悟もとここの種をまぐ海は首 東巴

唯よりりお桑横野の積茶屋 倫仙

虚無僧の下駄よりあるお坐外 吟罔

身をあるお壁紙の土足外 有舍

百姓の漬とりしとれ壁うね 沾雪

一城をえんる 粘の花壁かな

重陽菊

大原之子種の中ハ菊草

ありきれ菊もてしを親の慈

長き根や花の流れて菊の尺

きく後一の皆波なりさ久し

玉垂香の魚交まやきく酒

名のたぬよ多井越へき菊花柳

九年酒の月にも花の菊

千菊門
雲浪堂
龍角

感生舟
鶴史

向井氏
卜宅

綠蔭舎
英松

此菊翁
沾涼

一瀧門
雪朝

笠山

山

生植

院む日や海ぬすくも葉野既

落栗や清乃耳の小庭夜

かゆす藤小里いあきう推流

表丸

賀朝

五山

文久のぬれ子糸線子の朱川外

不化寮子玉章あると外

駕籠かある少り分り坂やきり

竜角家士
白角

交月人
調山

沾涼

氣歌

層の菊の幸に二階もあるよ波

層の菊の淵田の柳柳の夕月外

花虫も笑ふよ一束のぬをきり

待月の枕ししむの菊

よの層や氣遠るる夕廓

調柯

五百武

智十

紀州若山
一勢

水戸住
如水

雑煉

音のしと墨鏡のなるぬ林の山

つきて是の神いともと放生會

露門
龍泉舎
吟市

露岳

荒蘭崎

五月の月をこぼりてゐる音 魚路

五石歳のまを鳴りやあ代の鶴

鴨立沢

水はさかすま

湯本

舟の角くとまらぬ身なまは

小男舞の虫の尾髪角八郎

二子山

夕まともいりーとれや月二子

箱根社

富士のみのりかへては

水十きり九尺の釜子多葉の如

譚 僊

をささげ九輪川ぬくあゝの如

表も葉子も香樹かろす風

寒さげい大いさよ屋をう

下れ舟すらのあまの五人

森あく水の朝日でも月あま

拍子いさぎ鏡白く鶴路

湯そあゝの生田やあまてあま

振若く富士をかめよかろく

くくらんとまゝても靴花あや

短と一度子味噌大豆の古酒

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

上はあせてしるしの糸は花の人
お花のりさか 去らう一時 沾

西園の梅東の春帳或は茅屋にありはたよらん子白の
いしききよや。答よのを葉かきいしてを帳とみよはす

秋来ぬと見えたる舟のうらみ
介我門涼技
梁技

五常

仁相傘の六分いふ家河由り里
千翁息

義いふく自にの海さぬ蕨外
不局

禮先ッ虫よ指をいふぬ扇子
玲角

智燕又よの海を鳥に明の梅
荷角

信君う門下車てよ園の時き
辰角

玄指

後り初梅の長きをそと人
露沾

小春

拈入乃代とんかりをり林有月
狸

一体の袖下鼻一と此浪濤
調柯

時雨

藤卷すて鶯の羽をよよ時雨
雪朝

全堂のくたしをえする時お外
賀朝

葛樹の実のそちをれか
板垣 柳塙

ふはも海の指なる
千翁 東月

船賣ハ得らる程ある
善角門人 善珠

子野一海も海や一とれ
調山

(下)

三三

伊賀上整宗道

霜 氷

まのねや馬さへ喰ぬ草食
恙てもく蝮蛇よん素の照
ひの響くまをくさるはるまの香
立雪のさしつかりぬ氷の如

冬 川

入水をおびはくりや冬河原
幣ふゆき水めさむきや後一松
よこそい金の蓋なりを北川
川面うのぬき物なき一枕の上
白鷺乃結文長一氷り川
牧方の鳴きなき一急食舟

穀我
英松
周皎
竹裏

丹志
吳竹
東江
沾涼
臣女
泉竜

落 葉

果ハ皆佛乃通子落葉外
入相子撞のこされて落葉う如
頃日の下弦子音如き木の葉外
落葉流ふ治郎老き小倉山
記て麻て結子木の葉のうれ外
枝晴もて本分一羽おら葉外
枝と枝をの道をあふ落葉外
見下りか糸菴りのおらもうら
豆腐は尾長舞はる落葉うら
小鹿子体んで通る落葉外
一志め五今年のおのわら葉外

蓮之
雪朝
梅宇
東岡
吳竹
涼宇
紅夕
漁光
鈴角
李條

千倉門
一漁門
佳風門
佳風門

きり花て尺並て足踏の本意外
点まれの香ゆき竹のあらそ外
きぬくの境八所 産葉外

郡山
匍匐
云々

天、不測のきあり人、聖表の質あり
今、香、芥、よ、ま、せ、つ、も、と、せ

産葉の上迄下々み 荏うら
禁に、年月の雨禁り 却葉うれ
端、に、の、産、を、添、く、る、産、葉、外

玉全
沾原
千本

雪

うつら、や、神、香、の、海、牛、乃、角
白、ゆ、や、と、と、愈、て、七、墨、あ、の、香
白、炭、の、香、ゆ、一、雪、の、料、理、福
き、ぬ、ひ、配、の、心、を、熱、く、る、雪、情、心

長水
賀朝
千洗
雪朝

きり幕や五つうら、ま、ま、お、り

江戸
其孫

うつ香よかひく、海、比、翼、楫

扇的

うつ香、産、根、葉、菊、の、行、の、む、く

有林

産葉

産葉、や、方、十、所、ハ、正、月、気
あ、ら、り、折、冬、至、の、梅、比、神、葉、香
産、葉、を、や、育、く、始、か、く、心

魚路
露庭
夕佳

拈野

あ、ら、り、言、は、し、も、あ、ら、り、言、は、し、の、心
さ、ら、り、言、は、し、も、あ、ら、り、言、は、し、の、心
拈、野、の、形、や、墨、法、の、一、ら、り、言、は、し
あ、ら、り、言、は、し、の、油、の、心、を、か、か、り

ト宅
東隣
百二
布仙

雜 冬

降子子ハ縁子を以ててを推
 足跡のそよよりきみみよれ外
 誓死して松の腕を冬乃瀧
 炭俵あきくや人を八王子
 ころあを補云信 苦汁
 六くくくやまのくくく一里抗
 六くくく乃色や麻のくくくろろ
 芳よりひくく云婦一夜配里
 汲小ごす様のかくくくや淀八裾
 羊尾
 明日多ん乳をえええ福壽草
 沾涼
 好夕
 千靈
 安祖
 梅五
 有佐
 布仙

人丸大明神聖像

宗祇法師恭敬像
 杉白木御長五寸五分
 頓阿法師作 任吉奉納一軀
 御筆後以岸姫松作之

正一位乃子傳ハ於阿波所の作宗祇法師之教
 乃其傳にして宗教のつらつら侍賀園上野候東氏
 喜三 生國尾刈清洲織田家士 後爲醫齋居伊賀國 之宗教の門人なり
 乃くくくを附屬 是政安 號三悦沾涼父
 禱多而後服部土芳 半左衛門ト云 芭蕉高弟にあはく羊あり
 二十余年以て不宝永のころ予故郷に執りぬ

初此係を以て土芳も早古人し妻婦
まなり誰にもくはあは政安の云土芳は
甥本津宗七師と云ふとあると通つて
同小宗七云土芳在世の時此跡来り北余目そ
あり連津の跡あり後彼係を語嗟して
賦譜一笈よ介して云ふ人のいふ如き
天神の宝號ありして出とて人の紙よ

天満宮宝號一幅 山崎宗鑑筆 山口不貫書

と記ししと云ふと云ふてゆくは長門
乃今かりしし于時享保十四巳酉八春道芝と云
ふよりこのふのまの人北凡倫仙余之助ト云い
我の人意の係あり是れ其にありし連歌師

乃不指りて謂ある像し連歌の會ふとい
杖をふりしと云ふと割りし河多し流しし
今の我の應せとては流よあへてりか前とて
五月廿二日倫仙此係をとりしと云ふと云ふ
ありて全ねし職合の表ありと云ふと云ふ
辭して云くこの事をうと云ふといふは
そのまの人の心を同ぬ是山口不貫生國長門國蒲刈
享保十巳七月卒
于時七十二
性所は芝
人丹野惣柙 道芝ノコし受くといふ
よあはめりし歸影なりは事さく信あり
まの草屋いといふと云ふと云ふといふと當所
熊手神田宮の境内に遷座なりと云ふと云ふ

崔下菴譜書

人店大明神法樂

影うのすくくと新樹乃高角山 雀下流
硯よる石見の出く 朝清の 菊田布仙
凍しき和ほのくの帆、松の肩 同 梅五

造立の連各法樂

六の神の鳥帽子なうく和の牡丹 宇田川春
帆かかしの海や茂るや神の砥 笠井魚路
去るまよの月一曇し花外本 中島立島
初より井一あまに浮くや雲の海 河津玉風
とつ垣もあま一あまの唯作り 小森笛之
みきり一やみくたを通も花さぬ 岩田涼之
時とまやまもくもくは神標 北尾倫仙

中よりとや秋の神話のすく
神・詠いさえくもくは
ゆるそくし明るのまゝあまの風
時見一唯今在るはくの実
又米田智朝
北尾千洗
栗本雪朝
川勝文岳

柄本人丸 ^{七ヶ}の大事 ^{石見}國戸郡の

人家の柄の末のそまの重形を出現とす
石見國より化生まると云事 ^{口史}

神龜元年二月十八日年 ^{口史}
持統帝文武帝聖武帝平城帝の御事あり
式人の云其御家いづら古今の事その集乃

中の事のみならず、各歌の趣もよく述べたこと、
古今集の中の日やあゝあまきやむし〜と云々の
事を取り出し、大和の事とて作らば、是に修徳物語
乃中のみならず、あゝあまきやむし〜と云々とや七
るを、是の事とて〜あゝあまきやむし〜と云々とあり
りしは、是の事とてあり
人唐四人も、橘中八人、山倉、玉手倉、押海倉
あり〜列〜の人なり

一郡三巻 旧法より抄ぬ

泊涼子乃後、後彼機と、建家乃始
誹祖、以は當世〜至と、門弟と、携家
宗通乃、統々〜と、此〜一匡〜一
系、譜と、詳行〜して、以て、継ぎ〜
次に、古往、此、明師、乃、累世、此、先達
及、現、在、作者、乃、教、乃、集、く、此、れと
緯と、中〜、最後、に、句、合、歌、仙、等

〇

〇

微々此雜更と彼也——く授候
 ありよそ——きり古風の公道あり
 中比の伊達家今此地好浅る事
 な——吟嘯乃流眸と暢くささ
 取よ是家地あり——やま——云爾
 涼子の請よ趣て野雙卜宅漫に
 跋寸頗鄙陋と恥家而已



